

## ブーバーとベングリオンによる聖書理解をめぐる論争 —1957年の論争を中心に—

平岡光太郎

### 要旨

本稿は、現代ユダヤ・ナショナリズムにおける聖書理解の一端を、マルティン・ブーバーとダヴィッド・ベングリオンの論争から明らかにすることを目的とする。まず20世紀のユダヤ・ナショナリズムにおけるブーバーとベングリオンの関わりについて概説する。その後、イスラエル建国（1948年）前後に二人のあいだでどのような論争があったのかを踏まえた上で、聖書の理解が中心となった1957年の論争を考察する。イスラエル建国から9年が過ぎた1957年8月12日、ベングリオンはエルサレム・イデオロギー会議を開催して、イスラエル国内の知識人を集め、自身の聖書に関する理解、メシアニズム理解に関する講演を実施した。会議から約2カ月後の10月4日、「特質とシオンについて」という論考によって、ブーバーはベングリオン批判をダヴァル紙において公に展開した。この論考を読んだベングリオンはすぐにダヴァル紙編集部に書簡を送って、ブーバーへの反論を試み、同年10月9日、ダヴァル紙上で、「論争相手への回答」という論考を発表した。意見の食い違いはあるものの、イスラエル国における問題について聖書やユダヤ教のメシアニズムを中心に考えるという点において、この二人は共通している。二人がぶつかり合うのは、国家の位置づけである。つまり、ブーバーにとってイスラエル国における預言者的正義の実現である神権政治が重要であるのに対し、ベングリオンにとっては預言者の語る物質的側面、すなわち現実的国家的存在が重要となる。この二人を相互補完の関係として見る研究者もいる。ベングリオンはこの関係を受け入れることがあっても、当時のブーバーがベングリオンとの相互補完の関係という枠組みを受け入れることはないだろう。

### キーワード

マルティン・ブーバー、ダヴィッド・ベングリオン、シオニズム、聖書、神権政治

## **Dispute between Buber and Ben-Gurion over “Understanding the Bible” with Focus on the Debate of 1957**

Kotaro Hiraoka

### **Abstract:**

This paper aims to shed light on the understanding of the Bible in the context of modern Jewish nationalism, highlighting a dispute between Martin Buber and David Ben-Gurion. I first outline the relationship between the two men in the framework of 20th-century Jewish nationalism. Then, based on the disputes between them before and after the founding of the State of Israel (1948), I consider the dispute of 1957, which centered on the understanding of the Bible. On August 12, 1957, nine years after the founding of the State of Israel, Ben-Gurion held a meeting in Jerusalem with a group of Israeli intellectuals, in which he lectured on his understanding of the Bible and messianism. On October 4, about two months later, Buber publicly criticized Ben-Gurion in the newspaper Davar in an essay titled “On Character and Zion.” After reading this essay, Ben-Gurion immediately sent a letter to the editorial department of Davar in an attempt to refute Buber, and on October 9 of the same year Davar published his essay titled “Answer to a Contender.” Despite their differences of opinion, the two men shared a common view of the problems in the State of Israel that centered on the Bible and Jewish messianism. Where the two clashed was on the status of the state. That is, Buber advanced the importance of theocracy, which is the realization of prophetic justice in the State of Israel; on the other hand, Ben-Gurion stressed the importance of existence in the materialism of the prophets’ discussions, specifically the existence of an actual state. Some scholars see the two viewpoints as mutually complementary. While Ben-Gurion may have accepted this characterization of such a relationship, Buber would not have acceded to this framework of complementary relations with the views of Ben-Gurion at the time.

### **Keywords:**

Martin Buber, David Ben-Gurion, Zionism, Bible, Theocracy

## 1. はじめに

一般的に、現代ユダヤ・ナショナリズム研究では、現実の政治活動に重点を置いた「政治シオニズム」やその政治的活動などが考察の主要な対象となる。しかし現代ユダヤ・ナショナリズムは、かならずしも政治的言説として明示的に構成されたわけではなく、文学・芸術・学問などの振興・復興を通じた共同体の再生を語る文化的言説の内でも醸成された。これらの活動の中で聖書解釈が担った役割は小さくないため、これを見逃すことは偏ったユダヤ・ナショナリズム理解という問題に至る。実際に、現代の世俗派のユダヤ人にとって、聖書はアイデンティティ形成のための重要な源泉となり、そこから汲みだされた民、土地、国などの内容が現代的な様相を伴って、人々の心に吸収されていった状況があった。このことから現代ユダヤ・ナショナリズム理解を試みる際に、聖書解釈に着目し、そこに現れる宗教と政治の関係の在り様を明らかにすることは必須の課題である。また彼らが聖書の伝承をどのように再構成したかを見ることも重要となる。

20世紀初頭に各国でナショナリズムが徐々に席卷する中で、ユダヤ人内部の状況を見ると、一方では、「ユダヤ人問題」を国家建設によって解決することを目指す「政治的シオニズム」の立場の人々がおり、テオドール・ヘルツル (Theodor Herzl, 1860–1904) がその中心人物であった。他方、ユダヤ・アイデンティティを「宗教」として理解し、自身のいる国のナショナリズムに同化して生きることを目指す人々もいた。こうした同化の立場をとる人たちは「伝統的律法を守る宗教派」と「律法を無視する世俗派」に大まかに分けられる。

このような時代状況に現れた二人の人物に着目する。一人は、マルティン・ブーバー (Martin Buber, 1878–1965) であり、彼はユダヤ文化の振興、ユダヤ・ルネサンスを表明した代表的人物の一人であった。もう一人の人物はダヴィッド・ベングリオン (David Ben-Gurion, 1886–1973) である。彼は社会主義シオニストの代表的な人物であり、イスラエル建国以前からユダヤ人の政治活動に深くかかわり、建国後に初代首相となった。二人はそれぞれシオニストを自負していたが、政治的な問題においてたびたび衝突した。この衝突は、両者のあいだにユダヤ・ナショナリズム理解における根本的な違いがあるために起こったものと考えられる。ブーバーとベングリオンの数々の論争について、それぞれの政治的な結論に着目するだけでは不十分であり、彼らのナショナリズム理解を反映する聖書理解を分析・比較し、彼らの思想を根源から理解することが肝要である。ベングリオンとブーバーを扱う理由は、両者が自身の思想形成において聖書を重要視しており、パレスチナ・イスラエルにおける政治的な問題を、聖書的な観点から捉えて論争したからである。ちなみに2023年がベングリオン没後50年にあたり、彼のナショナリズム理解に再び脚光

が集まる可能性が高い。本稿では、ベングリオンとブーバーのあいだでなされた論争を明らかにすることを目的とする。

## 2. 人物紹介

### 2-1. ブーバーについて

マルティン・ブーバーはウィーンのエダヤ人家庭に生まれた。幼いころに両親が離婚し、祖父母の下に預けられ、ユダヤ教徒として教育を受ける。祖父のソロモン・ブーバーは実業家（地主、穀物商、鉱山業）であると同時にミドラシュ研究者としても有名な人物であった。祖母のアデーレ・ブーバーが幼少期のブーバーの言語教育に大きな影響を与えたとされる<sup>1</sup>。アデーレは家庭教師による語学を中心とする人文教育が重要と考え、10歳になるまではブーバーを学校に通わせなかった。ブーバーがドイツ語と親密になったのは、この祖母による影響が大きいとされる。家庭内ではドイツ語を話し、外ではポーランド語やイディッシュ語を話した。学校に通い始めると、そこでは、ギリシア語やラテン語などの古典語を習った。シナゴグにて生き生きとしたヘブライ語に触れ、14歳になるころには、その言語能力を生かして祖父のミドラシュ研究の手伝いをしていた<sup>2</sup>。14歳から祖父母の家を離れ、父親の下で暮らすようになる。農業を営む父親が、農場の馬たちに挨拶する姿などを通し、「人間関係において直接的であることを習慣としている人は、自然に対する関係においても、同胞に対するのとちょうど同じ程度に直接性を重んじるということ」<sup>3</sup>を学んだ。

青年となったブーバーは、世紀末のウィーン大学にて文学、美術史、また哲学の勉強に専心した。ナタン・ビルンバウムの『近代ユダヤ教』を読み、その中で、ユダヤ教の民族思想と社会思想の統合がなされていることを確認し、シオニズム運動へと傾倒するようになった。テオドル・ヘルツルの下で雑誌編集に携わるも、1904年のヘルツルの死後は、ブーバーは政治的シオニズムと距離をとることとなった。そして当時のブーバーは、ユダヤ人がユダヤ・アイデンティティを失って、それぞれのホスト社会に完全に同化することにも反対した。彼はハスィディズム（ユダヤ教敬虔主義）を軸とする新たなユダヤ性を「ユダヤ・ルネサンス」として標榜し、聖書翻訳などのユダヤ文芸の復興に携わった。翻訳の他にも聖書に関する多くの著作を執筆し、1938年にドイツからパレスチナへ移住した。1950年代のイスラエルにおける政治的なメシア信仰のイデオロギーの根源に、ブーバーの影響があったことがMichael Kerenの*Ben-Gurion and the Intellectuals* (1983)において指摘されている<sup>4</sup>。

## 2-2. ベングリオンについて

ブーバーより8歳ほど年下だったダヴィッド・ベングリオンは、ロシア領ポーランドの地方都市プウォインスクに生まれた。彼が生まれた当時、街の全人口約7900人のうち約4500人がユダヤ人であり、残りはロシア人やポーランド人だった<sup>5</sup>。プウォインスクは、ヒバット・ツィオン運動が設立された街であり、ハスカラー（ユダヤ啓蒙主義）とシオニズムという二つの潮流が渦巻いていた。占領者としてのロシア人はユダヤ人共同体やポーランド人共同体に介入することはなかった。この二つの共同体はお互いを嫌っており、疎遠な態度であった。森によると、「ユダヤ人が他民族と隣り合いながら分離して生活しているという環境の中で彼のシオニストとしての情操がはぐくまれた事は後に大きな意味を持つ」<sup>6</sup>。

ヘブライ語や聖書というユダヤ文化の伝統とハスカラーの世俗的な近代主義を調和的に受け入れる姿勢については、祖父と父から吸収していた。ベングリオンは3歳の時から祖父のツヴィよりヘブライ語を習い、聖書への愛もこの祖父から受け継いでいた。すでに「ヘデル」（児童のためのユダヤ教教育機関）に通う前には、ヘブライ語での受け答えをできるようになっていた。ツヴィは、メンデスルスゾーンのドイツ語訳のついたトーラーをベングリオンに読み聞かせていた<sup>7</sup>。ツヴィはスピノザを崇敬しており、プラトンからカントまでの西洋哲学、またマイモニデスからナフマン・クロフマルまでのユダヤ思想にも精通していた。ベングリオンはヘデルで学んだ後、家庭教師から世俗の学問を修めた。父の家に、シオニストが集まるようになり、少年時代のベングリオンは人々の議論を聞きながら、イスラエルの地への憧憬を深めていった。若かりしベングリオンはロシア文学やシオニズム関連の著作を読んでいく中、アブラハム・マプーによる『シオンへの愛』とストーリー夫人の『アングル・トムの小屋』から消えぬ重い印象を受けた。前者からはイスラエルの地への憧れ、後者からは「隷属と依存への嫌悪感」を受け取った<sup>8</sup>。1900年に彼は友人たちと共に少年たちにヘブライ語を教えるシオニスト青年運動エズラを設立した。1903年にポグロムによって生じた避難民を英国領であった東アフリカのウガンダに移送し、そこにユダヤ国家を創るという「ウガンダ案」を、ヘルツルが提唱したことに反対し、イスラエルの地への移住を決意した。彼は、1906年にパレスチナへ移住し、その後、1920年代より労働党の書記長を務めるなど、政治活動に邁進するようになった。1940年代にはパレスチナにいるユダヤ人の政治的代表者となっており、1948年にイスラエル国の独立を宣言した人物となった。政治活動に勤しむ傍ら、聖書をはじめとするユダヤ伝承を学んでいたことは有名である。シャピラによれば、ベングリオンの政治・国家思想において、聖書が中心的要素へと変化するのは、1947～1948年の戦争とイスラエル建国以後のことである<sup>9</sup>。ベングリオンは、多く

の知識人と直接に関わったことも知られており、現代イスラエル社会においては、様々な分野について博学であったと認識されている。

### 3. 先行研究

国内では、ブーバーの聖書翻訳を扱う、堀川敏寛による『聖書翻訳者ブーバー』（2018年）が刊行されているが、ブーバーのナショナリズム理解やシオニズム思想との関連において、その聖書解釈は十分に検討されていない<sup>10</sup>。早尾貴紀は、ブーバーのナショナリズム理解を『ユダヤとイスラエルのあいだ』（2008年）で扱っているが、ブーバーの聖書解釈に脚光は当てられていない<sup>11</sup>。ベングリオンについては、彼を扱う邦文の単著が5冊で、いずれも聖書解釈が十分に検討されていない。手島勲矢が4部からなる「分割か、統合か〈ベングリオンとブーバーの理想と現実〉」<sup>12</sup>において、二人の論争を扱っている。手島はブーバーの理解が聖書に由来する可能性に言及しているが、この論考において聖書を主題とはしていない。

国外において、ブーバーの聖書解釈を扱う著作は数多く存在する。Michael Kerenの*Ben-Gurion and the Intellectuals*は、ベングリオンとブーバーのメシアニズム理解を問題としており、聖書解釈全体への考察とはなっていない。ベングリオンとブーバーの論争は、Paul Mendes-Flohrの編集による、（1988）ארץ לשני עמים（『ひとつの土地にふたつの民』）においてまとめられている<sup>13</sup>。Mendes-Flohrの著作は、ユダヤ・アラブの問題が主題となっており、聖書に関する問題を中心として扱っていない。また聖書の理解をめぐる二人の論争についても言及していない。ベングリオンとブーバーの聖書解釈の比較に特化したものとして重要なのは、Shalom Ratzabiによる「歴史・神話としての聖書—ダヴィッド・ベングリオンとモルデハイ・マルティン・ブーバーのシオニズム思想における聖書の位置に関する比較考察」である<sup>14</sup>。Ratzabiはベングリオンとブーバーの聖書理解を広範に扱っており、本稿の問題意識はRatzabiによる論考の延長線上に位置づけられる。Ratzabiの研究に対する本稿の特色は、1957年にベングリオンとブーバーのあいだになされたダヴァル紙上の論争に着目する点である。

この論争に着目する理由は、ベングリオンとブーバーが聖書の理解を問題とするからであり、またダヴァル紙上で論争が広く公開され、人々に共有された現代ユダヤ・ナショナリズム理解についての格好の事例だからでもある。1957年は、イスラエル国家が建国されてから9年目に当たり、新しく創設された国家が10年という節目を迎える直前の場面であった。国家が持続したことにより、シオニズムの目的はすでに完遂されたと考える人々も出現し始めていた。



次項では、まず1948年の建国前後になされた二人の論争の一端を確認した後、1957年の論争を考察する。

## 4. ベングリオンとブーバーの論争

### 4-1. イスラエル国家建国以前と建国直後の論争

Maurice Friedmanによると、二人の論争は、1949年にベングリオンが公職を離れるまで続いた。1930年代後半から、パレスチナでユダヤ人が多数派となるという方針に対して、ブーバーは反対を唱えるようになる。1944年5月に『ベアヨット』で掲載された論考において、この観点からブーバーはベングリオンを名指しで批判している<sup>15</sup>。それによると、「できるだけ多くのユダヤ人がパレスチナに移住できるようにする」から「パレスチナで多数派になる」というベングリンの方針の転換が問題であった。ベングリオンがユダヤ人の国家を創設しようと願ったのに対し、ブーバーは二民族一国家を目指した。

1948年3月10日にイスラエル国の初代首相にベングリオンが選出され、その約2週間後、ベングリオンは、テル・アヴィヴの邸宅に、国内の著名な知識人たち—作家、詩人、大学の研究者—を招待し、「新しい国家の道徳と精神の方向付けについて協議した」<sup>16</sup>。ブーバーは協議の口火を切り、政府自身には国の道徳的性質の形成に対する直接的な役割がないというベングリオンの主張に、異議を唱えた。プラトンの哲学者による統治についての言及からブーバーは議論を始め、思想家たちの言葉に人々が耳を傾けることをイマヌエル・カントが切望したことについて言及した。この願いもまた実現されていないとブーバーは考え、新しい首相の意図が実現されることを願った。つまり、精神的な人間が、民族教育のために大きな組織を創設することを提案したのだ。ベングリオンが国家的理性を主張したのに対し、ブーバーは、国家による善の行為を主張し、アラブ人難民について言及した<sup>17</sup>。

### 4-2. 1957年の論争（ブーバーによるベングリオン批判）

論争のきっかけとなったのは、1957年8月12日に実施されたイデオロギー会議である<sup>18</sup>。時系列を列举すると、会議から約2カ月経った同年10月4日のダヴァル紙において、ブーバーが「特質とシオンについて」（על הסגולה ועל ציון）というタイトルで会議において語られた内容を寄稿しており、このブーバーの記事を読んだベングリオンが10月6日付でダヴァルの編集部へ反論の手紙を送っている。その後、10月9日のダヴァル紙にベングリオンが寄稿した「討論相手への回答」（תשובה למתווכחים）が掲載されている<sup>19</sup>。

ブーバーがダヴァル紙に寄稿した「恩寵とシオンについて」(על הסגולה ועל ציון)が最初に刊行されているため、まずはこちらの内容を確認する。ブーバーは記事の冒頭で、ベングリオンによる聖書研究者イエヘズケル・コイフマンの理解について言及している。それによると、一神教において、イスラエルと他民族のあいだに根本的な分裂があるとするコイフマンの見解にベングリオンが反対したことは正しかったが、宗教と道德の結びつきこそがイスラエルと世界の諸民族を分けるという説を立ち上げたことは正しくなかった。なぜならインドやペルシアにおいても古代の教養においても宗教と道德の結びつきを見つけることができるからだ。ブーバーによると、イスラエルに特別なこととは、民全体のあらゆる生とあらゆる社会的で政治的な実践が、真の王なる神の意志に服従することである。この神はその王国において正義と真実の実現を求め、それはイスラエルの内部のみならず外部に対しても同様なのである。

ブーバーによるとこの統治こそが「神権政治」(תיאוקרטיה)ではあるが、それはヨセフス・ベン・マティティヤウ(ヨセフス)が語ったような、祭司統治のことではない<sup>20</sup>。ブーバーによると聖書には神権政治が二つの形式によって現れる。一つ目は、士師記に現れるような原始的な政体であり、古代において危機のときに神の靈に包まれた人々(אנשים אחווי הרוח)が、唯一の統治者である神の名において実施した統治である。二つ目は、神の代理として王になされた、預言者たちによる油注ぎに現れる。それによると、この油注ぎにおいて、民の社会的で政治的な生活において、王たちに神の正義と神の真実を具現化することを預言者たちは要求している。預言者たちは政治的な力をもっておらず、彼らができることは、抗議することだけであった。ブーバーによる「神権政治」の主張は、そもそも1932年に刊行された『神の王権』(Königtum Gottes)において、聖書学者であったユリウス・ヴェルハウゼンとの論争において、古代のイスラエル民族の政治的理想をめぐる展開されたものであった。この1957年の論争の際には、「神権政治」理解を軸に、いわば「身内」でもある、イスラエル国家の首相であるベングリオンをブーバーは批判している。ブーバー研究という文脈で考えると、彼の「神権政治」の思想が新たな段階に移ったと見做すことができる。ちなみに1932年の論争の際には、神が王であり、いかなる人間の支配をも否定するのが神権政治であると強調されるのに対し、1957年の論争では、この強調がほとんど見られない。

ブーバーによる神権政治における預言者の役割の続きを見ていく。それによると、王が過ちを犯すとき、サムエル記下7章14節にあるように、神は「人間の杖」によって王に懲らしめを与える。つまり、預言者たちが天の大使としてやってきて、王を叱り、もし王がその道を変えることなく、油注ぎにおいて彼に課せられたことをし



ない場合、王とその民の上に滅びを預言する。この使命を、預言者たちは彼らの生命をかけて実施した。預言の目的はイスラエルの偉大性を示すことであるが、この目的は手段を聖化しない。この目的の本質に対立する手段は、この目的を汚し、毒し、その目的を怪物へと変えてしまう。

ブーバーによると、イスラエルの若い世代は聖書の特定の箇所、特に、その地の占領物語や勇敢な王たちの物語、いくつかの預言者の言葉などに関心をもつとベングリオンが主張したことは正しい。しかし、預言の歴史的使命を顧みることなく、預言者たちの現実を見ることはできない。ベングリオンが「メシアの幻 (החזון המשיחי)」を生きたユダヤ教の第二の礎石と見做したことは正しかったが、この民の贖い<sup>21</sup>を人類の贖いと並べるだけでは十分でない。預言者たちによるメシアの知らせは、要求ということにおいて特別なのであり、神は人間の行為を求め、神の王国を実現し、世界の贖いにおいてその道に参加することを求める。この要求は特にイスラエルの民に向けられ、模範的なはじまりを実施することが求められる。これについて預言者イザヤは異邦人について、以下のように宣言しているのである。「彼らは大河のようにシオンの山へ向かう。普遍的な第二のトーラーを授かるためであり、ヤコブの家よ、主の光の中を歩もうという呼びかけを授かるためである」<sup>22</sup>。ブーバーは、預言者たちによってなされた要求が当時の人々だけでなく、あらゆる世代の人々、特に私たち（ブーバーたち）の世代にも向けられていると主張した。

ベングリオンが述べた言葉の背景にあるものは、政治的要因を至上のものにしようとする意思だとブーバーは考える。それによると、ベングリオンは「思想」と「ヴィジョン」を懸命に強化するあまり、生ける神の声を人間が聞くことを妨げる者、いわば世俗化を提唱する者の一人となってしまう。世俗化は「政治化」を誇張した形をとっている。この生活の「政治化」は精神そのものを攻撃する。精神はその思想と展望とともに凋落し、政治の機能となってしまう<sup>23</sup>。その後、ブーバーは、この政治化という現象が現在全世界で頂点に達しているが、これは聖書時代に根をもつものだと説いた。つまり、聖書時代において、イスラエルの王の何人かは間違った預言者たちを雇い、その預言者の務めは国の政策の機能に過ぎなかったのである<sup>24</sup>。

ここでブーバーが語ったことは現代のシオニズムの問題と結びついており、彼によれば、シオニズムは空洞化し、肯定的で具体的な内容を欠くようになった。ベングリオンがその名によって語るところの「イスラエルの若い世代」の目には、シオニズムがイデオロギー上の時代錯誤となってしまった。ブーバーによると、ベングリオンの理解ではシオンへの希求はすでにその目的を達成したことから、シオニズムは、すでに内容と理由をもっていない。しかし、シオンの名をその旗に書いた人

々、シオニストと自身を呼ぶ本当の人々は、それが実現したと語ることは意図しておらず、新たに理想を達成することを語る。ブーバーによれば、もし彼らが「あなたたちはイスラエルの地においてユダヤ人国家を希求するのですか」と尋ねられるならば、「私たちはシオンを希求する。シオンが創設されるために、私たちは私たちの地において独立を獲得することを欲する」と答える。現代において、このように感じるシオニストたちがさらにおり、この地に昇ってきて、ここまで実現していないシオンの夢を見続けるのである。彼らはその国家がシオンへの一步を含むことを本当に望んでいる。シオンを望まず国家を望んだ見せかけのシオニズムは、その目的に達したために限界へと至っている。しかし、真正なシオニズム、シオンへの愛、「力ある王の都」（詩編48編3節）の観点において、これを創設することの願いは、生き生きと存在するとブーバーは主張する。これに対し、ベングリオンはおそらく次のように語るだろう。「シオニズムの思想は死んだが、メシアの思想は生きており、それはメシアの日々にまで生きる」。ベングリオンのこのような主張に、ブーバーは以下のような疑問で答える。「この国のいまの世代のうちに生きているメシア思想のほとんどは、離散の集結に限定した、国粋主義と違わないだろうか」。ブーバーの理解では、人類の贖いの希求と、その実現に加わろうという願望をともなわないメシア思想は、もはやイスラエルの預言者たちのメシア観とは異なるものである。預言の使命が、来たる神の王国（ביאת מלכות שדי）を信じる気持ちの欠いたメシア思想と同じであるはずはない<sup>25</sup>。

#### 4-3. 1957年の論争（ベングリオンによるブーバーへの応答）

ベングリオンは上記のブーバーによる批判の記事（10月4日掲載）を読んだ後、10月6日付でダヴァル編集部へ手紙を送っている。上記のブーバーによる批判において、ベングリオンは神の声を妨げる世俗化を提唱する者とされ、その世俗化が「政治化」という装いをとっているとされる。この議論の冒頭で、ベングリオンは、メシアによる贖いのヴィジョン、ユダヤ的信仰の要、預言などに言及しており、ベングリオンを世俗化の提唱者と見做すブーバーの評価は、ベングリオンの肺腑をえぐるものであったことは想像に難くない。手紙の内容は、オンライン上のベングリオン・アーカイブで閲覧が可能である<sup>26</sup>。

この手紙の冒頭には、ブーバーがベングリオンに反論した際に、その場に居合わせることができずに残念であることが語られている。これはFriedmanの評伝には書かれていない情報であり、そもそも対面での論争ではなかったことが確認できる。そしてベングリオンは、彼の目に特に重要と思われた以下の四点について、コメントすることを求めている。

一点目は、宗教と道德の関係についてである。ブーバーが批判した「宗教と道德の結びつきこそがイスラエルと世界の諸民族を分ける」というベングリオンの見解について、ベングリオンは、これがインドにおける一神教のヴェーダンタの教えについてのみ語っていたことであると弁明している。シャンカラの理解によれば、唯一の最高神（ブラフマ）は形而上学的な存在であり、知性の力によってのみ、これと交わり合うことができる。そしてこれは良き実践にはよらず、ブラフマはこれらの実践にまったく関心をもたない。

二点目は、メシアニズムについてである。ブーバーが「メシアの幻 (החזון המשיחי)」を生きたユダヤ教の第二の礎石と見做したことは正しかったが、この民の贖いを人類の贖いと並べるだけでは十分でない」と批判したことについて、ベングリオンは自身の立場を「贖いの政治化」と関係づけられたことはブーバーの誤りであると考ええる。ベングリオンは、イスラエルの民が異国の地に留まり、よそ者の恵みに依拠している間は、民に贖いは訪れないと考えており、この点についてはブーバーも同意見であるを見做している。祖国における国の独立は、ユダヤの贖いの基礎の一つであり、彼が考えるように、それは全体ではない。離散の集結、自由と正義と公平と被造物への愛を欠いた、また全人類の贖いを欠いた完全なる民族的 (לאומית) な贖いはあり得ない。

三点目は、イスラエルにおけるシオニズムについてである。それによると、国外において「ツィオニヨット」(シオニズムの複数形)と呼ばれるものについてベングリオンは言及することを回避した。これはシオンへの希求が達成されたからではなく、ディアスポラにおいて自身を「シオニスト」と呼ぶ者たちの大半は、この希求から立ち退いているからである。彼らは、自身がそのなかに住んでいるところの異邦の地と異邦の民にとって、自身が有機的な一部であると考えている。「イスラエルにいる誰よりも、この国家は幻が結実したものではあるが、幻の実現ではないと常に主張してきた」とベングリオンは説明する。「なぜなら私たちはまだこの始まりの末端に立っているだけであり、私たちの前には多くの険しい道が広がっている」<sup>27</sup>からである。

四点目は、「来たる神の王国」(ביאת מלכות שדי)についてである。ブーバーが「来たる神の王国」という言葉で何を意図したかが明らかではないとベングリオンは説明する。そしてベングリオンは、神的な事柄についてブーバーに反論する気はないとしている。「どれほどの心のうちに、メシアの思想が生きているか」という問いについて、それが離散の集結にだけ収斂しないのみならず、全人類の贖いを慕うものであるとベングリオンは主張する。そしてそのような思想は、イスラエルの開拓青年や労働市民、精神的な人々のうちには、ブーバーがおそらくメシアの幻とい

う名でそれを呼ばないにせよ、存在するのである。ベングリオンによると、イスラエルの贖いと人類の贖いを実現するという信頼に足る希求は、実践を伴っており、この地を建てる多くの人々のうちに鼓動している。この希求は可能性に応じて、イスラエル国家の行為を導いている。

#### 4.4. 1957年の論争（ベングリオンによるブーバーへの公開回答）

上記の10月6日付のダヴァル紙編集部への手紙の内容をもとに、10月9日の「討論相手への回答」（תשובה למתווכחים）は書かれている<sup>28</sup>。討論相手という表現が複数形になっており、ブーバーのみならずNathan Rotenstreichなどに対する回答も含まれている。内容が重複する部分もあるため、ここでは、ブーバーに関する事柄について、特に追記のあった部分、変更のあった箇所についてのみ言及する。

ベングリオンによれば、預言者が正義と慈愛と憐みについて語ったことについて、彼とブーバーのあいだに差異は無いとする。しかしベングリオンが強調するのは、イスラエルの預言者が、物質的で政治的な贖いについても語っていたことである。この証拠として、ベングリオンは聖書の箇所を引用する。

わたしは東からあなたの子孫を連れ帰り  
西からあなたを集める。北に向かっては、行かせよ、と  
南に向かっては、引き止めるな、と言う。  
私の息子たちを遠くから  
娘たちを地の果てから連れ帰れ、と言う。（イザヤ書 43 章 5 – 6 節）<sup>29</sup>

彼らはとこしえの廢墟を立て直し  
古い荒廢の跡を興す。  
廢墟の町々、世々の荒廢の跡を新しくする。（イザヤ書 61 章 4 節）

彼らは家を建てて住み  
ぶどうを植えてその実を食べる。（イザヤ書 65 章 21 節）

その日には、ユダは救われ、エルサレムは安らかに人の住まう都となる。その名は、『主は我らの救い』と呼ばれるであろう（エレミヤ書 33 章 16 節）。

ベングリオンは引用元を示すことなく、上記の四つ聖書箇所を連続する章のようなかたちでつなげている。引用によってベングリオンが示そうとしているのは、神が

人々を世界の様々な地域から連れ戻し、帰ってきた人々が廢墟に新しく住居を建て、そこで農作物を育てて、食するというものである。つまり、物質的で、政治的な贖いなのである。興味深いのは最後の箇所がエレミヤ書からの引用となっており、引用元を示さないためにあたかも一人の預言者が語っている内容にも見受けられる。ベングリオンはイザヤ書 65 章 21 節（「彼らは家を建てて住み、ぶどうを植えてその実を食べる」）を引用しているが、この聖書の次の節には、「彼らが建てたものに他国人が住むことはなく 彼らが植えたものを他国人が食べることもない」（イザヤ書 65 章 22 節）という言葉が続いている。「預言」の内容が必ずしも「人類全体の恩恵」を目指していない場合もあり、ベングリオンが意図的にこの箇所を避けた可能性が高い。なおブーバーは上記の聖書箇所をこの議論において特に扱うことはしないが、預言における「全人類の贖い」を語るためには、意図的にイザヤ書 65 章 21 節のような箇所を「見落とす」必要が出てくる<sup>30</sup>。

ベングリオンは、さらにブーバーとの国家観の違いについて言及する。「ブーバー教授は、国家は道具以外の何物でもないと言う」<sup>31</sup>。ベングリオンによれば、国家は当然、道具であるが、それは貴重なものであり、それなくして、解放や独立、自由な創作などはありえないのである。ちなみにベングリオンが引用する聖書の箇所には、そもそも「国家」（מדינה）という表現は出てこない。この単語は中世には「都市」を表し、ベングリオンが語る「国民国家」としての意味合いを単語がもつようになるのは、近代に入ってからのことである。

10月9日の「討論相手への回答」におけるベングリオンのメシアニズム思想の中で興味深いのは、ベングリオンによる「贖いの始まり」（אתחלתא דגאולה）という表現である。10月6日のダヴァル編集部への手紙では、「この始まりの末端（קצה ההתחלה）に立っている」<sup>32</sup>と書いており、二つの表現には違いが見られる。「始まりの末端」（קצה ההתחלה）はヘブライ語の表現であり、「贖いの始まり」（אתחלתא דגאולה）が、アラム語の表現である。後者は元々、バビロニア・タルムードのメギラ17bなどに見いだされる表現であり、ユダヤ教的色合いが強いものとなる。ちなみにイスラエル国家をגאולתא דאתחלתאという表現を用いて「贖いの始まり」と見做すのは、ハラブ・クックなどの宗教右派の人々の特徴の一つである。つまり、ベングリオンは、国民に公開された10月9日の「討論相手への回答」においては、より宗教右派に馴染みの深い表現を用いたのである。

## 5. おわりに

本稿において、現代ユダヤ・ナショナリズムの在り様の一端を示すために、1957

年のダヴァル紙上でなされた、ブーバーとベングリオンの論争を考察した。そこで語られるナショナリズムに関する議論において、現代の政治的な内容に留まらず、聖書を中心とするメシアニズムが問題となり、「預言者」、「正義の実践」、「神権政治」、「(人類の) 贖い」といった言葉が飛び交う状況にあった。つまり、イスラエル国の首相を務めたベングリオンと当時の代表的な知識人の一人であったブーバーが、数千年前に書かれた聖書の内容を根拠に現代の問題やシオニズムについて議論したのである。

ブーバーからの批判に対し、ベングリオンの回答を確認したところ、自身の主張がブーバーと変わらないということ、またブーバーの誤解であることを、説明しているように見受けられる。この二人は様々な点において衝突したにも関わらず、聖書の重要視とメシアニズムの保持という共通の意識をもっていたといえることができる。

二人の違いは、メシアニズムの思想における国家の位置づけである。ベングリオンにおいては、メシアニズムの枠組みの中で国家が重要な役割を果たすのに対し、ブーバーのメシアニズム理解において国家は重要性をもたない。ブーバーにとってより重要なのは神の王国であり、それは正義の実現による神権政治の現実化という装いをもつ。そしてブーバーにとって、正義の実現はアラブ人との共生に関わっており、たとえその思想が聖書やメシアニズムに根差していたとしても、この実現を伴わない場合には批判の対象となる。ブーバーによるベングリオン批判の内容から、それが神権政治に関する論争だったことは明らかである。しかし、ベングリオンの応答を見る限り、ブーバーが神権政治という言葉で何を主張しようとしているのかが、不明瞭であったようである。

最後に、ベングリオンとブーバーの関係をどのように捉えるかという問題に対する、Michael Keren による指摘を確認する。Keren は彼らが「同じ精神的環境に存在する事ができない」という Ernst Simon による主張を引きつつも<sup>33</sup>、イスラエルにおける政治思想の発展において、二人にとってその関係性が明白ではなかったとしても、彼らの相互利益の関係を過少評価すべきではないとする<sup>34</sup>。つまり、ベングリオンとブーバーを相互に補完し合う関係であることを Keren は提案している。ブーバーの誤解を解こうと努めるベングリオンは、このような相互補完の関係を受け入れることに異議を唱えることはないだろう。他方、本稿で確認した、預言者的な正義の実現（神権政治）、アラブ人との共生ということを強調する当時のブーバーは、ベングリオンとの相互補完の関係という枠組みを拒否すると思われる。

※ 本稿は JSPS 科研費 (21K12849) の助成による研究成果の一部である。



注

- 1 モーリス・フリードマン『評伝マルティン・ブーバー（上）』黒沼凱夫・河合一充訳、ミルトス、2000年、26頁。
- 2 同上、28頁。
- 3 同上、34頁。
- 4 Michael Keren, *Ben-Gurion and the Intellectuals: Power, Knowledge, and Charisma*, (Illinois: Northern Illinois University Press, 1983), p. 75.
- 5 森まり子『社会主義シオニズムとアラブ問題 ベングリオン軌跡 1905～1939』岩波書店、2017年、28頁。
- 6 同上、29頁。
- 7 .8 – 7 עמ' 1975, בן-גוריון, בית אבי, 1997.
- 8 森まり子、前掲書、31頁。
- 9 .247 – 217 עמ' 1997, תל-אביב, 1997.
- 10 堀川敏寛『聖書翻訳者ブーバー』新教出版社、2018年。
- 11 早尾貴紀『ユダヤとイスラエルのあいだ — 民族／国民のアポリア』青土社、2008年。
- 12 手島勲矢「分割か、統合か〈ベングリオンとブーバーの理想と現実〉①」『月刊ミルトス』第47号5月（1999年）、4-9頁。手島勲矢「分割か、統合か〈ベングリオンとブーバーの理想と現実〉②」『月刊ミルトス』第49号7月（1999年）、15-20頁。手島勲矢「分割か、統合か〈ベングリオンとブーバーの理想と現実〉③」『月刊ミルトス』第51号9月（1999年）、18-24頁。手島勲矢「分割か、統合か〈ベングリオンとブーバーの理想と現実〉④」『月刊ミルトス』第55号（2000年）、22-25頁。
- 13 .1988 מרטין בובר (עורך: פול מנדס-פלור) ארץ לשני עמים, ירושלים ותל-אביב 1988.
- 14 שלום רצבי 'התנ"ך כהיסטוריה וכמיתוס: עיון משווה במקומו של התנ"ך בהגותם הציונית של דוד בן-גוריון ושל מרדכי מרטין בובר, מאיר חזן ואורי כהן (עורכים) תרבות, זיכרון והיסטוריה – כהוקרה לאניטה שפירא, כרך שני: תרבות וזיכרון ישראלי, ירושלים 2012 עמ' 447 – 496.
- 15 マルティン・ブーバー『ひとつの土地にふたつの民』合田正人訳、みすず書房、2006年、151頁。ブーバーの息子のラファエルがブーバー研究に携わっていたポール・メンデス＝フローにイスラエルにおけるユダヤ・アラブ問題に関するブーバーの選集を依頼したことがきっかけで、1988年に『ひとつの土地にふたつの民』のヘブライ語版が刊行された。合田は、1993年に出版されたドイツ語版から翻訳した。ドイツ語版になった際には、さらなる論集も追加されている。
- 16 モーリス・フリードマン、前掲書、327頁。
- 17 当時の文書では、「パレスチナ人」については、「アラブ人」と表記されることが多かった。
- 18 ブーバーはこの会議を הכינוס האידיאולוגי と表現し、おそらくこの表現に従ったと思われるフリードマンはこれを Ideological Conference と表現し、邦訳では「イデオロギー会議」と訳出されている。ベングリオンが編集部へ反論の手紙を送った際、「理論の会議」( הכינוס העיוני ) と表現し、その後ダヴァル紙に掲載された寄稿文を Daivd Ohana が転載した際には、「アイディアの会議」( הכינוס הרעיוני ) と表現している。  
.144 דוד אוחנה, משיחות וממלכתיות – בן-גוריון והאינטלקטואלים בין חזון מדיני לתיאולוגיה פוליטית, ירושלים 2003, עמ' 144.

- 19 David Ohana は著作の中で、1957年にダヴァル紙上に掲載された書簡とベングリオンがダヴァル紙に送った手紙を転載している。Ohana は掲載されたそのままのかたちを残して、読者が論争について判断すべきであると考えている。דוד אוהנה, ה"ל, פתח דבר.
- 20 ブーバーは、神による直接の統治である「神権政治」の思想を、1932年に刊行された『神の王権』(Königtum Gottes)で展開している。これについては、以下の拙稿で扱った。平岡光太郎「現代ユダヤ思想における聖書と政治思想 — マルティン・ブーバーの神権政治とイスラエル文脈におけるその受容 —」『一神教学際研究 6』、2011年、52-66頁。
- 21 キリスト教の文脈では「救済」として語られるような内容は、ユダヤ教では「贖い」(ゲウラ, גאולה)と表現される。
- 22 この箇所はブーバーによるイザヤ書2章の言い換えである。
- 23 モーリス・フリードマン、前掲書、332頁。
- 24 同上。
- 25 同上、333頁。
- 26 תשובה של בן-גוריון לדברים של פרופ. בובר אשר פורסמו בגיליון "דבר".  
[https://Ben-Gurionarchive.bgu.ac.il/search-api/bg\\_arc/129309](https://Ben-Gurionarchive.bgu.ac.il/search-api/bg_arc/129309) (閲覧日: 2022年12月13日)
- 27 同上。
- 28 דוד אוהנה, עמ' 144 – 150.
- 29 聖書の引用は、日本聖書協会の新共同訳聖書から行う。
- 30 聖書学において、イザヤ書の著者が複数人いた可能性について、度々言及される。
- 31 דוד אוהנה, עמ' 147.
- 32 דוד אוהנה, עמ' 275.
- 33 Simon Ernst "Buber or Ben-Gurion?" *New Outlook* 9 (February 1966), pp. 9-17.
- 34 Michael Keren, op. cit., p. 80.